

先の第4版から5年の歳月を経て、責任編集者の一部、執筆者の全員が交代した第5版が出版された。第4版まで幾度か執筆に携わった者、つまりOBとして書評を試みてみた。OBという立場は基本的に後輩(第5版)に優しくはあるが、内情をよく知っている立場として厳しくありたい。しかし、結論から申し上げると、厳しく見つめても本書は座右の書として完璧に近い内容をもっていると思う。その理由をいくつか挙げて、読者の参考に供したい。

診断の基本的な目標は“正しい確定診断に至ること、それを正しい治療に応用すること”に尽きる。そのための工夫は本書の構成を「症候編」と「疾患編」に分けたことから始まる。つまり、本書は症候から診断へのアプローチの仕方と、疾患からの攻め方の逆向き双方向から構成されている。症候編では、「症候のメカニズム」、「定義」、「原因」などから始まって、「緊急処置」にまで及んでいる。「診断のチェックポイント」は親切的な項目であるし、「鑑別のポイント」も重要である。「どうしても診断のつかないとき試みることは理論を踏まえながらも執筆者の経験に照らしたポイントが書かれてあって貴重であり、本書の目玉の一つであろう。筆者はこの項目の執筆に苦心した記憶がある。

疾患編は、救急疾患から始まり内科系、外科系疾患を網羅し、外来の小外科的疾患に至る。診断上の常識としてまず「診断のポイント」が書かれ、「移送の判断基準」、「症候の診かた」、「検査とその所見の読みかた」、「確定診断のポイント」、「鑑別すべき疾患と鑑別のポイント」と続く。これらの項目は、確定診断に至るアプローチが執筆者の考え方や経験を踏まえてきめ細かに述べられている。「移送の判断基準」はプライマリケア医にとっても専門外の疾患を

診た場合にもよいガイドとなろう。皮膚や顔貌の視診所見などの基本的な事項はよく選別され鮮明なカラー写真で提示されている。イラストやフローチャート、漫画、表も活用されて、理解に役立つ。また昨今の画像診断法の進歩に合わせて、典型的症例の内視鏡、超音波、CT、MRI、RI、病理組織像などの写真が提示されており、第一線の臨床医にとって脳裏に残る貴重な画像ばかりである。

診断指針とはいいいながら、診断確定で終わらず診断後の対応つまり「予後判定の基準」、「合併症・続発症の診断」、「治療法ワンポイント・メモ」など、治療や予後に触れているのも本書の特徴であろう。「さらに知っておくと役立つこと」は最後のだめ押し的に、あるいは補足的に執筆者が長短自在に書き残している。

巻末の「基準範囲一覧表」には臨床検査値が網羅され、この表単独でも成書となりうる内容とボリュームがある。近年、検査値の異常は自動的に診断され表示・プリントアウトされるので、値そのものが軽視されがちであるが、値の意味(例えば活性か、蛋白量か)、測定法による値の違い、単位の表現法、短い解説・注、変動幅など参考になることが多い。

以上、OBとして「厳しい目」で見たが、第一線の臨床医や研修医が必要に応じて、また診療の合間にひもとく座右の良書として推薦したい。蛇足ながら、きめ細かく多面的な項目を立てたこと、全疾患を網羅したことの2点に加え、症候と疾患の双方向から診断を助けるよう工夫された手引き書は、欧米を含めて外国に類を知らない。

(ゲスク判 B5判 2136頁 定価25,200円(本体24,000円+税5%)
(ポケット判 B6判 2136頁 定価18,900円(本体18,000円+税5%)
2002年 医学書院 刊)